The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	肥満度別、病型別にみた血圧が脳卒中死亡に及ぼす影響の疫学的研究 : 日本人代表集団の長期追跡調査から
Author(s)	宮松, 直美
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45429
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【8】

氏　　名	宮（みや）　松（まつ）　直（なお）　美（み）
博士の専攻分野の名称	博　士（保健学）
学　位　記　番　号	第　１９３７５　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 医学系研究科保健学専攻
学　位　論　文　名	**肥満度別、病型別にみた血圧が脳卒中死亡に及ぼす影響の疫学的研究 －日本人代表集団の長期追跡調査から－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　三上　　洋 （副査） 教　授　大野ゆう子　　教　授　牧本　清子

論　文　内　容　の　要　旨

本邦における脳卒中死亡は、低栄養状態の改善、降圧治療の普及、減塩の広まりなどにより劇的に低下したものの、その予防はいまだ重要な課題である。高血圧が脳卒中の最も重要な危険因子のひとつであることは数多くの研究で示されてきた。一方食生活の欧米化に伴い本邦においては特に男性で肥満者の増加が著しい。肥満が脳卒中に及ぼす影響については意見の分かれるところであり、関連しないとするものから影響を与えるとするものまで様々である。これは、ひとつには肥満が血圧と脳卒中に交絡していること、次に同じ脳卒中であっても脳出血と脳梗塞とでは病態や発症機序が異なっており病型別の検討が必要であることを示している。そこで、日本人代表集団において血圧上昇が脳卒中死亡に及ぼす影響を病型別、肥満度別に検討した。

本邦における循環器疾患についての調査としては厚生労働省および日本循環器疾患管理研究協議会による 10 年ごとの循環器疾患基礎調査がその代表として挙げられる。しかしこの調査は、詳細な調査項目を有するにもかかわらず、10 年毎の断面調査であるため追跡調査による危険度評価を行うには至っていなかった。そこで、死亡をエンドポイントとした日本人代表集団の長期追跡調査が企画された。本論文は、その追跡調査のデータベースに基づいて検討された知見をまとめたものである。

1980 年に厚生省により全国から無作為抽出された 300 調査区の満 30 歳以上の全住民を対象に行われた循環器疾患基礎調査受検者 10,546 人を本研究の客体とした。1999 年に 19 年目の追跡調査が行われた客体のうち、脳卒中の既往がなく、かつ情報に欠損のない 9,338 人を解析対象とした。死因は人口動態統計による死因と照合された。解析対象者の平均観察年数は 17.3 年であり、追跡期間中に観察された脳卒中死亡は 311 人、うち脳梗塞死亡は 176 人、脳出血死亡は 68 人であった。BMI3 分位による肥満度別の分析では、中～高 BMI 階級で収縮期血圧上昇が総脳卒中死亡と関連していたのに対し、低 BMI 階級では有意な関連を認めなかった。しかし病型別の検討では、収縮期血圧上昇は低～中 BMI 階級で脳出血死亡を、中～高 BMI 階級では脳梗塞死亡を有意に上昇させた。この結果は拡張期血圧についても同様であった。本研究の結果から、血圧上昇が関連する脳卒中死亡は肥満度によって病型が異なるものの、脳卒中死亡の予防のためには全ての肥満度において血圧管理が重要であることが示された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本人を代表する9,338人の19年間の追跡調査においてBody Mass Indexおよび脳卒中病型別に血圧上昇による脳卒中死亡の相対危険度を評価した研究に基づき、血圧と脳卒中との関連に対する肥満度の影響を論じたものである。研究モデルには年齢、血清総コレステロール値、血清アルブミン値、随時血糖値、喫煙の有無、飲酒習慣の有無、降圧剤内服の有無、糖尿病既往の有無を含み、収縮期血圧および拡張期血圧10 mmHg上昇における全脳卒中死亡、脳梗塞死亡、脳出血死亡の相対危険度をCox比例ハザードモデルにより検討している。その結果、血圧上昇はBMI＜23.8 Kg/m^2の集団では脳出血死亡の、BMI≧21.2 Kg/m^2の集団では脳梗塞死亡の独立した危険因子であることを見出している。本論文は、わが国において近年重要な問題となっている中高年の肥満を視野に入れた脳卒中死亡に対する予防的健康施策確立に貢献するものと考えられ、博士（保健学）の授与に値すると認められる。